

「自然からの贈り物」を受け取ることと技術



随 筆

中 道 正 之*

How to receive gifts from nature and technology

Key Words : Monkey, Behavioral observations, Zoo animals

1. 自然の中で生きものを見つめる

ダーウィンが『種の起源』で彼の進化論を世に送り出したのは1859年、今から160年以上前のことです。彼は1831年に帆船のビーグル号に乗って、5年をかけて南米とオセアニアの国々に上陸し、様々な生きものの姿を自分の目で確認しました。これが土台となって、彼の進化論は生まれました。ビーグル号での旅を通してダーウィンが気付いたこと、発見したことは、『ビーグル号航海記』に多くの挿絵と一緒に詳しく紹介されています。挿絵の一つに赤道直下のガラパゴス群島に暮らす数種の鳥の頭部を描いたものがあります。この挿絵を見ると、くちばしの大きさや形状が鳥の生息する環境によって異なること、つまり異なるくちばしの大きさや形状が進化の産物そのものであることが、十分に納得できます。

『シートン動物記』は、日本でも多くの人が一度は手に取ったことがある本だと思います。自然の中で暮らす動物たちの姿が生き生きと表現されています。シートン自らが自然の中で動物たちの足跡や痕跡を追い、記録したことを土台にして、動物たちの生きざまを物語として書き記したからです。そして、画家でもあるシートン自身が描いた多くの挿絵が物語を一層魅力的にしています。このシートンが生まれたのは、『種の起源』が刊行された翌年でした。

ダーウィンやシートンだけでなく、今から一世紀も遡った時代には、生きものの姿を記録する手段は、ペンと紙しかなかったはずですが、木の上に停まっている鳥を見るときには望遠鏡を、葉っぱの上の小さい昆虫を見るときには拡大鏡（ルーペ）を用いていたかもしれません。でも、観察のときに使うことができる道具はそれくらいしかなく、ほとんどは自分の目に頼っていたと思います。鳥のさえずりや獣の吠え声を記録するためには、耳で聞き、それを言葉で紙に書き残すしかなかったと思います。そして、絵と文章で記録したものを広く伝える手段はモノクロの印刷物しかありませんでした。現代とは隔世の感があります。

1975年に、創設4年目の日本で最初の学部である阪大の人間科学部に私は入学しました。学部の3年生の時から阪大の定年が迫ってきた今までの40余年の間、私が行ってきたのは、野生のニホンザルの行動観察です。動物行動学という学問領域の中でサルを研究してきました。進化のプロセスを経て種によって動物の形態が異なるように、動物の行動も種によって異なります。種が互いに近縁ならば、行動も類似していることが多くあります。だから、サルの行動を見つめながら、進化の隣人でもあるヒトの行動の理解にも近づけるのです。

ダーウィンから一世紀以上も下った時代に、私は野生のニホンザルの観察を始めましたが、やはり、ダーウィンやシートンの時代と同じく、観察の必需品は、ポケットサイズの野帳（フィールドノート）とボールペンと双眼鏡と腕時計でした。彼らの時代には新しい物はカメラと腕時計ぐらいです。双眼鏡とカメラを首からかけながら、野帳にサルたちの行動を、見た時間とともに記録する、そして、時々、サルたちの行動をカメラで撮り、遠くのサルの顔を双眼鏡で確認したりします。もちろん、得られたデ



* Masayuki NAKAMICHI

1955年9月生まれ
大阪大学人間科学部卒 大阪大学大学院
人間科学研究科博士課程修了
現在、大阪大学大学院人間科学研究科
教授 学術博士 専門/霊長類学、比較
行動学、動物園行動学
TEL : 06-6879-8129
E-mail : naka@hus.osaka-u.ac.jp

一タの整理にはパソコンは必需品です。でも、野外観察では新しい技術（テクノロジー）に依存することはほとんどなく、40年余にわたるサル行動研究を続けてきました。そして、自然の中で暮らす生きものの姿、ふるまいを直接に目にしながら尋常でない喜びを感じるということを経験してきました。「自然からの贈り物」を受け取ってきたと言い換えてもよいでしょう。

日進月歩の新しい技術で、私たちが直接に目にすることのできない地球上の様々な自然だけでなく宇宙の姿を、あるいは、私たちが決して入り込むことのできない自分の体の中の世界まで、きれいな映像で見ることができるようになりました。事実、医療技術の進歩で、私は自分の胃や大腸の内部を定期検査の時に見ることができます。4Gから5Gに代わり、私たちの暮らしもこれらの新しい技術なしには、成り立たないように思えます。そんな時代でも、自分の目と耳とノートとペンだけで、自然からの贈り物をしっかりと受け止め、深い喜びを感じることもできるのです。ニホンザルの世界を紹介しながら、私が受け取った自然からの贈り物を、ほんの少しだけですがお伝えします。

2. サル学事始め

サルを対象にした研究は、日本ではサル学と言われてきました。その最初は、今から70年ほど前の1950年前後のことです。若い研究者たちが野帳とペンと双眼鏡をもって山の中に入り、ニホンザルを毎日追いかけて、群れには何頭のサルがいるのか、何を食べているのか、交尾期や出産期はあるのかなどのニホンザルの群れの暮らしを少しずつ明らかにしました。そして、食べ物を使ってサルを人に慣らすということが始まりました。餌付けです。最初に成功したのは1952年で、宮崎県の幸島と大分県の高崎山に生息するニホンザルの群れが餌付けて、毎日、サルたちが餌場に姿を見せてくれるようになりました。毎日、近くで顔を見ているとサルの顔も一頭ずつ異なることが分かるようになります。サルの顔を覚えられます。顔を覚えると名前も付けたくなります。名前を付けると、誰と誰が毛づくろいしていた、おとなメスのAとBがケンカすると別のメスCがきて、Aの味方をしたなどのように、サルの行動やサル同士のかかわりを、個体名を用いて記

録できるようになります。このようなサルの顔を覚えて名前を付けるという個体識別の手法を、日本のサル学は世界に先駆けて、野生ニホンザルの研究に用いました。個体識別ができるとサル同士の関わりを、科学的な手法にのっとって記録し、分析して、彼らの社会行動や子育て、子ザルの発達、群れの構造などを明らかにできます。欧米の先進国とは異なり、先進国の中で野生のサルが生息している唯一の国という利点もあり、サル学（あるいは霊長類学）が始まって半世紀以上も経過する現在でも、日本のサル学はトップ集団の一翼を担っています。

阪大でのサル学が本格的に始まったのは、1958年からです。岡山県北部の真庭市（当時は、真庭郡勝山町）にある名瀑「神庭の滝」の近辺に生息しているサルの群れへの餌付けに、地元自治体と阪大の研究者の共同作業で成功したのが1958年初頭でした。それ以来群れのサルの個体識別は、地元の人たちと阪大の研究者によって引き継がれてきました。



写真1. 1958年から2018年までの60年間のベラ血縁系のメスたち (一部)：神庭の滝のニホンザルの群れには、現在、7つの母系血縁系があり、ベラ血縁系はその一つです。60年余にわたり、多くの研究者が個体識別を引き継ぎ、継続しているため、この群れで生まれ育った個体の年齢と母系血縁が分かっています。白抜きの数字は、2006年7月時点で生存していたメスたち（破線で囲まれた枠内のメス）の順位。ニホンザルでは、母は娘よりも優位に、妹は姉よりも優位です。

ニホンザルのオスはおとなになる5、6歳になると生まれ育った群れを離れますが、メスは生涯を生まれた群れで暮らします。だから、個体識別の開始から62年経過した今、神庭の滝の群れで暮らしているすべてのサルたちの年齢だけでなく、母系血縁の祖を1958年の餌付け開始当初まで遡れます(写真1)。神庭の滝のサルの群れのように、群れのメンバーの血縁関係が半世紀を超えて記録され続けている野生動物の群れは、世界を見渡してもニホンザル、チンパンジー、アフリカゾウなど大変わずかです。だから、神庭の滝のニホンザルの群れは世界的にも貴重だと思っています。観察を継続していると、母と娘、姉妹などの血縁関係が濃い間柄だけで親しかかわるのではなく、血縁関係のないメスたちの中にも、子ザルの頃から20歳を超えて老いが目立つ頃まで親しかかわるサルたちもいるのがわかります。小さい頃の遊び友達の関係が老齢期まで続くこともあるのです。個体識別したサルたちの日々の関わりを追い続けていると、サルたちが思いもよらぬ姿、行動を見せてくれます。「自然からの贈り物」です。私が個体識別しているサルたち、つまり私が長年にわたりよく知っているサルたちの行動だからこそ、最新の技術を用いないでも、心躍る贈り物として、私が受け取ることができるのだと思っています。

3. 赤ん坊が生まれる瞬間

神庭の滝の群れを、私が本格的に観察し始めたのは1990年夏からです。それから1年たった6月初旬の夕方に、心躍るような瞬間に立ち会いました。ニホンザルの赤ん坊が生まれる瞬間です。

ニホンザルは秋から初冬に交尾して、約180日の妊娠期間を経て、春から初夏の時期に出産します。ほとんどは夜に出産するので、餌付けされているサルでも、餌場での出産を目撃する人はほとんどおらず、少なくともサル研究者では誰ひとりいませんでした。午後4時過ぎに、群れのサルに小麦の餌まきが行われ、どのサルも器用に小さな小麦の粒を両手の親指と人差し指で交互につまみ、口に運び入れていました。そんな時、小麦拾いをしないで、餌場近くの岩の上でひとり座っているメスに気づきました。8歳のメスで、2年前に初産で娘を産んでいました。ほんの少しの間見ていると、このメスは両手を岩に突っ張り、お尻を岩から少し浮かせて、背中



写真2. 観察していた著者に大きな感動を与えてくれた8歳のメスの出産。出産までの約30分間、母ザルは大きな声を出すことは一度もなく、生まれた赤ん坊も声を出しませんでした。ニホンザルの出産は「静かな出産」でした。

をアーチ状に曲げた姿勢になりました。この姿勢は30秒ほど続きました。私にはすぐわかりました。陣痛です。

陣痛を目撃してからは、そのメスをずっと見続けました。陣痛が治まると、メスは普通の座り方に戻り、再び、数分以内に次の陣痛です。その都度、両手を突っ張って頑張っているのがわかりました。私が持っていたのは、カメラと野帳とボールペンと時計。時計を見ながら陣痛時間を記録するのは無理です。その時、たまたま、小型のカセットテープレコーダーをポケットに入れていました。今から29年前のことですからICレコーダーはありません。テープは片面が30分でしたが、ずっと録音状態にすることにしました。そして、メスの数メートル以内に立って、「今、陣痛開始」とか「終了」などと、目の前で起こっていることをすぐさま声にして録音しました。このメスが歩くについて歩き、他個体とすれ違ったりするときも、誰とすれ違ったのかまで声で吹き込みました。そして、最後の時を迎えたのが常時録音を開始してから約25分の時でした。最初に発見したところから150メートルほど山の中に入ったところで、1分ほどの長い陣痛の後に、赤ん坊の頭が現れました。この一瞬をカメラで捉えることもできました(写真2)。

この後5分ほど、生まれた赤ん坊を胸に抱き入れながら、赤ん坊の顔や胸、腹、背中、手足と順に

舐めていた母ザルは、赤ん坊を胸にしがみつかせて、山の中に走っていきました。すでに、群れのすべてのサルたちが山の中に戻ってしまい、付近にはサルの姿は見えませんでした。このメスは群れについていくために、胎盤の娩出もしないで、山の斜面を駆け上ったのでした。わずか30分間ほどの観察でしたが、母ザルが山の中に姿を消した直後から、私は見送ったその場にたたずみ、記憶をたどりながら、野帳に一連の経過を書き込みました。ボールペンを握る私の手がかすかに震え、躍っているような字でしたが、かまわず、書きなぐりました。カメラの写真、テープレコーダーに吹き込んだ音声もあるはずなのですが、それでも、現場で、記録に留めることが、私の習性でした。顔も名前も知っており、そして、先輩たちのおかげで、年齢も出産暦も、血縁系統もわかっているメスが、私の目の前で、30分ほどにわたって野外での出産シーンを見せてくれたことが、手が震えるほどの感激をもたらしてくれたのだと思います。「自然からの贈り物」を実感した瞬間でした。

出産という一大事であるときでも、ニホンザルのメスが群れを強く求める存在であることがよくわかりました。そして、陣痛の時も、赤ん坊が生まれた瞬間も、母ザルは一度も声を出さなかったこと、生まれ出てきた赤ん坊も声らしい声を全く出していなかったことが確認できました。つまりサルの出産はとて「静かな出産」です。陣痛中の女性は痛みで大きな声を出し、赤ん坊もしっかりとした産声を上げます。だから、ヒトの出産は「賑やかな出産」となります。どうしてサルが「静かな出産」で、ヒトでは「賑やかな出産」になるのかはとても興味深い点です。その理由を学術的に議論したものはないようですが、私の試論を拙著の『サルの子育て、ヒトの子育て』（角川新書、2017）に書きました。

4. 孫の世話をする老ザル

写真3に写っている2頭のメスは自分の産んだ子ザルにそれぞれ授乳をしているわけではありません。2頭のおとなのサルは母と娘です。写真の右側に写っている娘は1カ月前に出産した赤ん坊に授乳しています。左側に写っている母が胸に抱き入れて授乳しているのは、娘が1年前に産んだ子ザルです。つまり、祖母が1歳になった孫を抱いて、おっぱいを飲ませているのです。ニホンザルでは連続出産



写真3. 1歳の孫娘を抱いて授乳する23歳の老メス(左側)。右側のメスは老メスの13歳になった娘です。娘は生後1カ月の赤ん坊に授乳しています。老メスが抱いて授乳しているのはこの娘の1歳になるメスの子ザル、つまり、自分の孫娘です。

するときがあります。そんな時、兄や姉となった1歳の子ザルは母からの授乳を受けることはできず、母からの独立が進みます。でも、ときどきは、授乳をしてもらえないけれど、母ザルに一層くっついたりする1歳の子ザルもいます。「幼児返り」のようなものです。写真の1歳の子ザルもそんな子ザルでした。この写真を撮る10分ほど前には、弟の赤ん坊が母ザルから離れた少しの間に、母の乳首に口を近づけていましたが、あっさりと母に拒否されていました。そして、この写真の場面です。祖母が孫娘に授乳をしていたのです。

祖母は23歳で、ニホンザルでは老齢といえる年齢です。この数年間は出産していませんでした。おっぱいは出ていなかったのですが、1歳の孫が乳首を含むことを許しました。そのあとも、祖母が孫を背中に乗せて運んだり、抱いたりしているのを頻繁にみるようになりました。それまでは、まったく見たことのない光景でした。私は、間違いなく、祖母が孫娘を抱き始めた最初の場面を確認できたのだと思います。1カ月後には、祖母の乳首から母乳が出るようになりました。老いた祖母と1歳の孫娘の母子のような関係は1年近く続きました。母の胸に入れなくなった1歳の子ザルにとっては、祖母の胸は安心できる場所だったと思います。高齢になり自分の子を産んで子育てできなくなった老メスが、孫の生存を助ける行動をしたのです。「出産の瞬間」のようなときめきを与えてくれたわけではないのですが、個体識別して、母と娘の関係、それぞれの年

齢も知っているサルたちだからこそ、「老いた祖母が小さい孫の生存を助けた」という事実がわかりました。徐々に高まる喜びを私は感じることができました。私は、ここでも素晴らしい「自然からの贈り物」を受け取ることができたのです。この出来事は学術論文だけでなく、BBCのホームページ Earth Newsにも掲載されています (http://news.bbc.co.uk/earth/hi/earth_news/newsid_8370000/8370743.stm)。

出産や祖母による孫の世話の他にも多くの「自然からの贈り物」を私は受け取ってきました。拙著『写真でつづるニホンザルの心と暮らしー岡山・神庭の滝の群れの60年』(大阪大学出版会、2019)でそれらを紹介しています。

5. 動物園で暮らす野生動物からの贈り物

私は野生のニホンザルの行動観察と並行して、20年以上にわたり、アメリカのサンディエゴ(カリフォルニア州)の動物園で暮らすゴリラたちの観察を続けています。このゴリラたちも数々の「自然の贈り物」を私に届けてくれました。その一つを紹介します。野生のゴリラは1頭のオスと数頭のおとなのメス、その子どもたちで群れを作って、葉、実、花、果実、草、竹などの植物を食べて、暮らしています。私が長年見ている動物園のゴリラの放飼場にも、ゴリラたちの大好きなイチジクの大きな木が10本ほどあるのですが、どの木の幹にも針金が張り巡らされて、通電されています。そのため、ゴリラはこれらの木には登れません。もし、ゴリラに木に登ることを許せば、葉や実を食べながら、枝を折ったりして、全部の木を枯らしてしまうでしょう。だから、イチジクの木にゴリラが登れないようにしてあるのです。ゴリラたちは、大好きなイチジクの実や葉が自然に落ちるまで待つしかありません。ところが、ワカモノに成長したゴリラの中の数頭が、長い木の棒をイチジクの枝を目掛けて投げることを始めました。投げるのに使う棒は、毎日与えられるたくさんの葉が付いたアカシアの木の枝です。食べるために小枝や樹皮をめくるので、最後には直径2-3センチ、長さ50センチから1メートルほどの棒になります。それを、2頭のゴリラがイチジクの木の下にまで運んでから、1本の棒の端を片手に持って、イチジクの枝を見上げながら、二足立ちになり、棒を下手で投げ上げて、イチジクの木に当



写真4. サンディエゴ・ワイルド・アニマルパーク(アメリカ・カリフォルニア州)で暮らすメスのゴリラ(当時、7歳のワカモノ)が頭上2、3メートルのイチジクの木の見上げながら、右手で棒の端を握り、その棒を投げ上げようとしている瞬間。棒が枝に当たれば、実と葉っぱが落ちてきて、食べることができます。貴重なゴリラの道具使用の瞬間です。

てるのです。そうすると、実や葉が落ちてきます。

このゴリラの棒投げを、この動物園を初めて訪れた日の、しかも、ゴリラたちを見始めて30分ほどしたときに私は目撃しました。ゴリラの道具使用行動です。1996年10月のことでした。当時は、チンパンジーの道具使用はよく知られていましたが、野生ゴリラの道具使用は全く報告がなく、飼育下のゴリラでも逸話的な報告だけでした。この事実を知っていた私は、目の前で展開するゴリラの道具使用行動の学術的な意義の高さを実感していましたが、同時に、ゴリラが棒を投げる姿そのものにも強く魅了されていました。木の下に立って、枝を見上げてから投げるゴリラの姿に知性を感じたのです(写真4)。見ていた来園者からも「Hoo」とか「Oh」とかの少し押し殺したような歓声や「almost human」と同伴者にささやく声もありました。このような来園者も私と同じ気持ちだったのだと思います。私はその後も毎日のようにゴリラの放飼場の前に朝から夕方まで立ち続けて、たまにやってくれる棒投げを記録していました。そのおかげで、ゴリラたちがより太くて長い棒を、つまり、投げやすく、枝に当たればより効果的に実や葉を落とせる棒を選択していることもわかりました。私は、動物園で暮らすゴリラたちからも「自然からの贈り物」をしっかりと受けるこ

とができました。

6. サル学、動物行動学と技術

飼育下の動物を対象にした心理学や認知科学の研究領域では、様々な技術を用いて対象動物の行動や学習・認知能力を調べてきました。装置の中に入れられたネコなどの小動物が紐を引くことで脱出できる問題箱は、今から100年以上も前に考案されたもので、当時のこの研究領域の貴重な実験道具でした。今日では、タッチパネル画面に映し出された課題に動物が正しく反応できれば、報酬としての食べ物が自動的に提供される実験装置も頻繁に利用されています。原理は古典的な問題箱とは大きくは変わらないと思うのですが、現代の研究では、パソコンはもちろんのこと様々な最新機器を使いこなせないと研究ができないといえるほど、技術（テクノロジー）が不可欠な研究領域となっています。

私が行っている野生場面での動物の研究でも、新しい技術が取り入れられています。尿や便を採集してホルモンなどを分析することで、動物の生理状況や心理状態を知ることが可能になっています。かつては、動物を一時的に捕獲して、採血し、血液サンプルを分析するという動物に侵襲的な方法しかなかったのですが、尿や便、体毛さらには動物が嘔んだ後に吐き出した食べかすも非侵襲的に採集できる重要なサンプルとなっています。これらを用いれば、動物の遺伝子情報の解析ができることもあり、集団のメンバーの父子判定にも用いることができます。ニホンザルでは、母ザルが子育てするので、母子の血縁関係は行動から簡単にわかります。しかし、オスもメスも複数の個体と交尾するので、子ザルの父が誰なのかはわかりません。父子の関係が分かることによって、オスの行動の意味や動物の社会を一層実証的に理解できるようになります。

動物を一時的に捕獲して、発信器やビデオカメラを装着すれば、動物の位置情報や動物が見ている世界を映像で捉えることができます。研究者が行くことのできない険しい地形で暮らす地上性動物や樹上性動物はもちろんのこと、空を飛ぶ鳥類、海に潜るペンギンやカメ、サカナなども新しい技術で、これまでは全くわからなかった彼らの暮らしぶりを知ることができるようになりました。技術の進歩で、発信器や電池の小型化が進み、動物にはより優しく、

研究者にはより長期にわたる追跡研究ができるようになっていきます。ドローンを用いて、草原で暮らす野生動物を映像で記録し、細かい分析もできるようになりました。

人工知能（AI）を用いたサルの個体識別も可能になりつつあります。私が個体識別できる神庭の滝のサルの群れでも、私の同僚たちがAIを組み込んだシステムの完成を目指しています。眼鏡型のウェアラブルコンピューターの「サルメガネ」を装着して、サルの顔を見れば、瞬時にそのサルの名前や年齢、性格などが分かる仕組みです。神庭の滝のサルを初めて見る人でも、「サルメガネ」を装着すれば、目の前のサルを一層親しく身近に感じることができると思います（詳しくは下記のアドレスを見てください https://resou.osaka-u.ac.jp/ja/research/2019/20190318_1）。技術の進歩によって、私がサルの観察を通して受け取っている「自然からの贈り物」を、サルの専門家でない人にも、享受してもらえる可能性が広がってきたのです。

7. 「自然からの贈り物」を共に楽しむ

研究者としての私の最も大事な活動は個体識別をしたサルたちを継続して観察し、彼らの暮らしぶりを実証的に描きながら、進化の隣人であるヒトの本性の理解に貢献する事実やアイデアを提出することです。他方、私には同じくらい好きなことがあります。実際のサルを前にした観察学習会や講演などで、小学生から私よりも年配の方々にまで、サルの暮らしぶりを一緒に見たり、お話ししたりすることです。サルと一緒に見ている人は、顔が分かることだけでなく、年齢、サル同士の血縁関係などもわかっているという事実にびっくりされます。私が撮った写真を見たり話を聞いてくださる多くの人たちも、サルの顔を一頭ずつ覚えていることでびっくりされ、それからサルたちのゴシップを楽しみ、サルの子育てやサル同士の付き合い方が、自分たちと似ていると感じ始められるのです。一般の方々が、私の研究を通じて、サルを身近に感じてもらえる瞬間とも言えます。

しかし、残念ながら私がときどき受け取ることができた「自然からの贈り物」を、現場でサルを見ている人や講演を聞いてくれる人に届けるのはそれほど簡単ではないと感じています。というのは、素晴

らしいプレゼントを受け取るためには、その準備も必要だということです。ここで紹介した「自然からの贈り物」を私にくれたのは、すべて私が顔を覚え、行動を記録してきたサルやゴリラたちでした。つまり、友達ではないけれども付き合いは長かったわけです。だからこそ、彼ら、彼女らの普通の行動の中から「自然からの贈り物」として強く感じる土壌を私自身が作っていたからだと思います。

「動物園は自然への窓(扉、入り口)」と言われる。動物園で暮らす動物が本来の野生場面で暮らしているところを見ることは難しい。簡単には見ることのできない野生動物を動物園で見て、その姿、行動に驚き、感動することや、野生の暮らしぶり、地球の自然環境に思いを馳せることができるし、思いを巡らせてほしいという願いも込めたのが、この言葉だと思います。そのためには、動物をもう少し眺め続ける必要があります。動物園を訪れる人たちが動物の前に立ち止まって見ている時間は平均すれば1分もありません。歩きながら見て、通り過ぎる人もたくさんいます。もう少しだけ立ち止まって見ているといろいろなことが分かるのに、残念だなと思います。安佐動物園(広島市)で、私が5年にわたり観察していたクロサイは、厚い皮でおおわれた1トンを超える大きな動物です。そのクロサイが顔の前面にある角先だけを互いに触れ合わせたり、角先を相手の顔やのどに軽く押し当てたりします。これほど繊細なやり取りの意味はまだ十分に理解されていないのですが、お互いの親しさを確認しているように、私には見えました(写真5)。その場面を見



写真5. 安佐動物園(広島市)で暮らすクロサイのオトナのメス(左、19歳)とオス(右、21歳)が、互いに近寄り角先をわずかに触れ合わせています。共に1トンを超える体重の持ち主であっても、これほど繊細な行動で関わることもあるのです。このペアからはすでに、4頭の子どもが誕生し、おとなにまで成長しています。

ているだけで、私はクロサイの奥深さを感じました。「自然からの贈り物」を受け取れた瞬間でもあります。

サル学にも、動物行動学にも、新しい技術(ハイテク)を用いた斬新な研究が今後はより一層展開されると思います。同時に、野帳とペンと双眼鏡だけを用いて、野生で暮らす動物、囲いの中で暮らす動物のどちらの動物にも、共に暮らす家族のように、あるいは、ときどきで会って話をする友達のように、継続した付き合いのある研究も大切だと思います。どんな研究分野でも、日々の継続なくしては新しい知見には到達できないと思います。それと同じように、日々の積み重ねの先に、「自然からの贈り物」を享受し、科学に貢献できる時が来るのだと思っています。

